

子育て中の親がもつシングルファザーに対する認識

平沼晶子

1 問題と目的

近年わが国においては、核家族化や少子化、母親の就労の増加、離婚率の上昇などの社会変化にともない子育てをする親の生活背景は多様化しており、そのひとつにひとり親家族¹の増加がみられる。厚生労働省（2005）の2003年度調査によると、母子世帯（父のいない児童がその母によって養育されている世帯）は1998年の前回調査に比べて28.3%増の122万5400世帯と急増しており、父子世帯（母のいない児童がその父によって養育されている世帯）も6.4%増の17万3800世帯と増加している。そして、全世帯に占める割合は、母子世帯が2.7%、父子世帯では0.4%と報告されている。これまで、日本におけるひとり親家族についての研究の多くは母子家族を対象としており、世帯数の少なさを母子家族に比して経済的に安定しているという認識もあって、父子家族は注目されてこなかった。しかし、現存する性別役割分業社会において父親が主養育者として子育てをするには、仕事との両立の困難や母親中心の子育てネットワークへの入りにくさなど、日本人のジェンダー意識から生じる様々な問題を抱えている。その様な状況において、シングルファザー²は生活上関わる人々からの理解と協力を必要としているが（平沼, 2008）、彼らに対する社会的偏見や同情の目はいまだに少なくないと指摘される（大日向, 2005）。従って、シングルファザーが増加傾向にある今日、シングルファザーの子育てに対する社会の認識を検証することは、彼らへの日常的で地域に根ざしたサポートを考える上で必要と思われる。

そこで、本研究ではひとり親家族を外側から見ている人々の意識に焦点をあて、乳児から中学生までの子どもをもつ親のシングルファザーに対する認識を明らかにすることを目的とする。乳児から中学生までの子どもをもつ親を対象とする理由は、子育てに関して義務教育までが子どもの世話や自立を支えていくひとつの区切りであること、子育てという共通の立場にある人々が自身の子育てと比較してシングルファザーの子育てをどう認識しているかを知ることにより、シングルファザーと他の親との連携の方向性が見出されると考えたからである。平沼（2007）は、シングルファザーの語りを分析した結果、彼らが直面する問題は、仕事と家事・子育ての両立の困難やそのための努力などに関する「生活や子育て」の側面、子どもの育ちや親子関係に関する「子ども」の側面、保護者および保育園や学校の先生との連携に関する「サポート」の側面からなり、これらがどのような状態にあり、どの様に調整されるかがシングルファザーの生き方に影響を与えていることを明らかにした。そこで、シングルファザーの「生活や子育て」「子ども」「サポート」の3側面から人々の認識を捉えるために以下の点を検討

する。

1.1 シングルファザーの生活や子育てについての認識

シングルファザーへのインタビュー調査（平沼 & 秦野, 2004）からは、主に経済的安定を担ってきた父親が新たに家事や子育てもこなすという多重役割による身体的、精神的負担が大きいことが示されている。また、シングルファザーには母性に対する幻想があり、どんなに頑張ってもお母さんの代わりはできないというジェンダーバイアスによる負い目もちやすい（大日向, 2003）。一方で、シングルファザーの手記からは、様々な困難に立ち向かいながらも、子育てを通しての父親自身の成長が示されている（土堤内, 2004）。そこで、シングルファザーにみられる仕事と家事・子育ての両立の難しさとそれによるストレス、親としての責任感や成長、母親がいないという子育て環境への不安について、子育て中の親の認識を検討する。

1.2 シングルファザーの子どもについての認識

シングルファザーの子育てにおいて、幼児期には躾、学齢期には教育や思春期の問題、それ以降も進学や就職など、成長に合わせて心配が尽きず、父親がひとりで子育てをすることへの不安がみられる（平沼 & 秦野, 2004）。一方で、思いやりや自主性など子どもの社会性の発達が促されることも示されている（池田, 1996）。そこで、父親ひとりの子育てが子どもの成長に与える影響について、子育て中の親の認識を検討する。

1.3 シングルファザーと子どもへのサポートについての認識

先述のとおりシングルファザーの子育てには周囲の理解や協力が必要とされている。そこで、子育て中の親がシングルファザー家族との関わりやサポートをどの様に考えているのかについて検討する。

そして、これらの3側面で示された結果に基づき以下の3点を明らかにしたい。第1には「シングルファザーの子育てに対する理解は示されるのか」というシングルファザーの心理や子育てへの理解についてである。第2に「父子家族という家族形態は問題とされるのか、また、シングルファザーの生活や子育てにおいて何が問題とみられているのか」についてである。父子家族が総世帯数の5%を占め、子どもの育つ環境の多様化が著しいアメリカ社会においては、両親の揃った家族が一般的という見方はされていない（Weinraub & Gringlas, 1995）。また、家族形態が子どもに与える影響を検討した研究からは、両親家族やひとり親家族といっ

た形態の違いよりも親子の信頼関係や親の養育態度など家族がどの様に機能しているかが子どもの成長には関係していることが明らかにされ (Demo & Acocck, 1996)、父子家族という形態が直接子どもに何らかの影響を及ぼすのではないという認識がもたれている。わが国とアメリカ社会とでは状況が異なることを考えれば、シングルファザーの子育てにおいて何が問題とみられているのかを家族の形態や機能という観点から捉えることが重要と思われる。第3に「シングルファザーに対する認識には回答者の属性による違いがみられるのか、そこには個人のもつジェンダー意識や生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのか」についてである。本調査と同時期の2004年の世論調査によれば、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考えを男性は女性より高く支持しており、男性の方が男女の役割分担を固定的に捉える傾向が示されている (内閣府, 2004)。また、男女共同参画社会といわれる今日にあっても、共働き夫婦とそうでない夫婦とでは家事分担や子育てに対する認識の違いがみられるといわれる (柏木, 1993)。従って、シングルファザーに対する認識についても、個人のもつ性別役割分業観、あるいは、生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのかを検討する必要があると思われる。

シングルファザーの状況には、離別や死別、子どもの年齢や性別、経済状態の違いなどによる個性がある。また、回答者の側にも実際にシングルファザーと接する機会の有無などにより認識は異なることが推測される。従って、これらの条件を統制した上での調査が必要と思われるが、本研究では、これまでなされてこなかったシングルファザーの子育てに関する意識調査の第一歩として、シングルファザーを「ひとり親として子育てをしている男性」と考えた時の、子育て中の親の認識の特徴を把握することを目的とした。そして、シングルファザーという「マイノリティ」を扱う場合に、回答に与える「社会的好ましさ」の影響も考慮しなければならないと思われるが、父子家族が増加する今日、人々がもつシングルファザーに対する認識の傾向を示すことには意味があると考えた。

2 方法

2.1 調査対象者

家族内に乳児から中学生までの子どもをもつ両親家族の親 407 人 (父親 166 人, 母親 241 人) である (回収率 67.6%)。対象者には、中学生以下の子どもの他にそれより高い年齢の子どもをもつ親も含まれている。調査手続きは3通りからなる。①東京都内のM私立認可保育園に質問紙の配布と回収を委託し、園児の父親 29 人と母親 82 人から回答が得られた (回収率 51.2%)。②東京都内のH公立幼稚園に質問紙の配布と回収を委託し、園児の父親 54 人と母親 72 人から回答が得られた (回収率 70.0%)。③筆者が保護者として属するPTAの関係者

や心理の職場や大学院の知人に手渡しまたは郵送で配布回収し、東京近郊在住で中学生以下の子どもをもつ父親 83 人と母親 87 人から回答が得られた（回収率 82.9%）。①②③において、夫婦ともに回答が可能な場合は 2 人分の質問紙を配布する様にしたが、回収にあたってはプライバシー保護の観点から照合することは差し控えた。調査期間は 2005 年 2 月－6 月である。尚、調査対象者には本研究の目的、意義について依頼文に明記し、個人が特定されないことを前提に発表および結果の社会的還元について同意を得た上で調査を実施した。

属性は以下のとおりである。親年齢：父親平均 41.2 歳（26-56 歳，SD6.1），20 代 3.0%，30 代 34.3%，40 代 53.0%，50 代 9.6%。母親平均 38.0 歳（26-53 歳，SD 5.0），20 代 4.1%，30 代 54.8%，40 代 39.8%，50 代 0.4%，無回答 0.8%。長子年齢の平均：9.2 歳（0-25 歳，SD 5.0）。長子の就学状況：未就学 134 人（32.9%），小学生 155 人（38.1%），中学生 70 人（17.2%），高校生以上 48 人（11.8%）。子どもの数の平均：1.9 人（1-4 人，SD 0.7）。子どもの性別構成：男のみ 112 人（27.6%），女のみ 117 人（28.8%），男女とも 177 人（43.5%），無回答 1 人（0.2%）。家族構成：核家族 87.7%，拡大家族 12.3%。父親の就労形態：フルタイム 397 人（97.5%），パートタイムその他 10 人（2.5%）。母親の就労形態：フルタイム 64 人（15.7%），パートタイムその他 128 人（31.4%），専業主婦 214 人（52.6%），無回答 1 人（0.2%）。

2.2 調査内容

以下の 6 領域から構成される質問紙を作成して調査を実施した。その際、シングルファザーとは「ひとり親として子育てをしている男性」と考える様指示した。

2.2.1 シングルファザーについての知識と考え

シングルファザーについての認識を検討するにあたり、回答者のもつ予備知識や考えは参考になると考え 6 項目を作成した。まず、「父親のみで子どもを養育する世帯が総世帯数に占める割合」を多肢選択法により 6 つの選択肢（100 世帯に 1 世帯・150 世帯に 1 世帯・200 世帯に 1 世帯・250 世帯に 1 世帯・300 世帯に 1 世帯・全くわからない）から単一回答求めた。「シングルファザーとシングルマザーの比率」についても同様に、6 つの選択肢（シングルマザーの 1/2・1/3・1/5・1/7・1/10・全くわからない）から単一回答を求めた。次に、公的支援について「シングルファザーはシングルマザーと同様の経済的支援がなされていると思うか」、生活や子育ての困難について「生活や子育てにおいてシングルファザーはシングルマザーより大変だと思うか」を、「思わない」「どちらかというと思わない」「どちらかというと思う」「思う」の 4 段階評定で回答を求めた。そして、「シングルファザーである理由としてイメージするもの」を 5 つの選択肢（離別・死別・離別と死別の両方・未婚・その他）より単一回答を求め、最後に、シングルファザーを知る経験について、「これまでシングルファ

ザーと接する機会があったかの有無」を尋ねた。

2.2.2 シングルファザーに対するイメージ

シングルファザーに対して抱くイメージは、シングルファザーに対する認識に関係すると考え、井上 & 小林 (1985) によるパーソナリティ認知に用いられやすい特性形容詞対を参考に、シングルファザーのイメージに関する 20 組の項目について 4 段階評定で回答を求めた (e.g., 暗い 1. とても (1 点) - 2. やや (2 点) - 3. やや (3 点) - 4. とても (4 点) 明るい)。

2.2.3 生活や子育てについての認識

シングルファザーの「生活や子育て」への認識を検討するために、平沼 & 秦野 (2004) で示された困難や負担感、土堤内 (2004) で示された責任感や成長、大日向 (2003) で示された母親不在の家族環境について 23 項目を作成し、「1. そう思わない (1 点)」「2. どちらかというところと思わない (2 点)」「3. どちらかというところと思う (3 点)」「4. そう思う (4 点)」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.4 子どもについての認識

シングルファザーの「子ども」への認識を検討するために、小田切 (2003) の「離婚家庭の子どもへの否定的イメージ」と「離婚による人間的成長」の因子項目を参考に、平沼 & 秦野 (2004) で示されたシングルファザー自身が不安に感じている父親ひとりの子育てによる子どもの成長や精神面に与える影響、池田 (1996) で示された子どもの社会性の発達など、子どもの育ちについて 14 項目を作成し、「1. そう思わない (1 点)」「2. どちらかというところと思わない (2 点)」「3. どちらかというところと思う (3 点)」「4. そう思う (4 点)」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.5 サポートについての認識

シングルファザー家族への「サポート」への認識を検討するために、回答者がどの程度協力的な姿勢であるのかについて 14 項目を作成し、「1. そう思わない (1 点)」「2. どちらかというところと思わない (2 点)」「3. どちらかというところと思う (3 点)」「4. そう思う (4 点)」の 4 段階評定で回答を求めた。

2.2.6 自由記述

シングルファザーに対する考えや調査への感想について自由な記述を求め、シングルファザーへの認識を検討するための参考資料とした。

2.3. 調査内容の分析

統計的処理は SPSS 分析ソフト (Ver.11.5) を使用し、得られたデータについて探索的因子分析 (最尤法、プロマックス回転) を行い、因子構造を明らかにした。その後、各因子で分散

分析または t 検定を行い、回答者の属性による違いを検討した。

3 結果と考察

3.1 子育て中の親のシングルファザーに対する認識

子育て中の親のシングルファザーに対する認識について、自由記述を除く調査 5 領域の結果を示し、本研究で明らかにする第 1 と第 2 の設問である「シングルファザーの子育てに対する理解は示されるのか」「父子家族という家族形態は問題とされるのか」「シングルファザーの生活や子育てにおいて何が問題とみられているのか」について考察する。尚、第 3 の設問については後述する。

3.1.1 シングルファザーについての知識と考え

まず、「父親のみで子どもを養育する世帯が総世帯数に占める割合」については、実際の「250 世帯に 1 世帯」³と回答した人は 7% で、実際より多い選択肢への回答が 35%、少ない選択肢への回答が 22% で、「全くわからない」が 36% だった。次に、「シングルファザーとシングルマザーの比率」については、実際の「シングルマザーの 1/7」⁴と回答した人は 10% で、実際より高い選択肢への回答が 47%、低い選択肢への回答が 28%、「全くわからない」が 15% だった。いずれにおいても、シングルファザーの動態に関する正確な情報を把握していないことが示された。

そして、「シングルファザーはシングルマザーと同様の経済的支援がなされていると思うか」に対しては、「思う」「どちらかというと思う」が 23% で、「思わない」「どちらかというと思わない」が 77% であった。また、「生活や子育てにおいてシングルファザーはシングルマザーより大変だと思うか」については、「思う」「どちらかというと思う」が 87% で、「思わない」「どちらかというと思わない」が 13% であった。実際にシングルファザーを対象とした公的支援は、一部の市町村を除きシングルマザーに比べて非常に少ない。回答者の 77% は同じひとり親であってもシングルファザーへの公的支援の少なさを認識し、87% はシングルファザーの方が生活や子育てが大変だと感じていた。

また、「シングルファザーである理由」については、現状では離別が死別を上回り離別によるシングルファザーが増加傾向にあるが、離別と死別の両方をイメージする人が 57%、死別が 24%、離別が 19% だった。最後に、「これまでシングルファザーと接する機会があったかの有無」については、「ある」が 145 人 (36%)、「ない」が 261 人 (64%)、無回答 1 人 (0.2%) だった。父親母親別でみると、「接する機会がある」と回答したのは父親では 28%、母親では 41% となっており、母親の方が接する比率が高かった。子どもの年齢別では、「接する機会がある」と回答したのは長子が未就学では 23%、小学生では 35%、中学生以上では

45% と子どもの年齢が高くなるほど接する比率が高くなっていった。

3.1.2 シングルファザーに対するイメージ

シングルファザーのイメージに関する 20 の形容詞対について 4 段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行った。因子の解釈については因子負荷量 .40 以上を基準に行い 7 項目を削除した。その後、採用した 13 項目について再度因子分析を行い、3 因子が抽出された（Table 1）。第 1 因子では、「思いやりのあるーわがままな」「真面目なー不真面目な」など人間性を反映する 5 項目で負荷量が高く、「誠実さ」因子とした。第 2 因子では、「頼もしいー頼りない」「強いー弱い」など力強さに関連する 4 項目で負荷量が高く、「たくましさ」因子とした。第 3 因子では、「明るいー暗い」「陽気なー陰気な」など活力に関連する 4 項目で負荷量が高く、「明るさ」因子とした。

次に、因子に含まれる項目の「評定値の平均値」を算出した。その結果、「誠実さ（ M 2.96, SD .65）」と「たくましさ（ M 2.73, SD .77）」は高めに、「明るさ（ M 2.34, SD .69）」は低めに位置した。そこには、シングルファザーを誠実でたくましいとイメージする一方、自由が少なく疲れているなどのやや暗いイメージも感じていることが示された。尚、以下でも同様に各因子の「評定値の平均値」を得点化して示した。

Table 1 シングルファザーに対するイメージの因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第 1 因子（誠実さ）				
思いやりのあるーわがままな	.84	-.19	.16	.64
真面目なー不真面目な	.77	-.06	-.17	.46
責任感のあるー無責任な	.73	.16	-.11	.63
落ち着いたー落ち着きのない	.55	.08	.03	.39
勇敢なー臆病な	.46	.27	.00	.45
第 2 因子（たくましさ）				
頼もしいー頼りない	.05	.87	-.13	.68
強いー弱い	-.06	.79	-.08	.49
外交的なー内向的な	-.04	.65	.22	.62
積極的なー消極的な	.04	.60	.15	.54
第 3 因子（明るさ）				
明るいー暗い	-.05	.10	.74	.61
陽気なー陰気な	.08	.07	.69	.61
自由なー不自由な	-.16	-.13	.65	.28
元気なー疲れた	.17	.03	.55	.44
因子寄与	5.08	1.16	.59	
累積寄与率 (%)	39.11	48.04	52.55	
信頼性係数 (α)	.83	.83	.75	
因子間相関	F1	1.00		
	F2	.65	1.00	
	F3	.48	.66	1.00

3.1.3 シングルファザーの生活や子育てについての認識

シングルファザーの生活や子育てに関する 23 の質問項目について 4 段階評定で得られた回答を用いて因子分析（最尤法、プロマックス回転）を行い、因子負荷量 .40 以上を基準に 7 項目を除いた。その後、採用した 16 項目について再分析を行い 4 因子が抽出された（Table 2）。第 1 因子では、「身体的に疲労している」「精神的に苦しい」などの 5 項目で負荷量が高く、子育てにおける困難や不安を反映する因子と考え、「子育てストレス」因子とした。第 2 因子では、「子どもへの責任感が強い」「子どもとの精神的つながりが強い」などの 4 項目で負荷量が高く、親役割としての責任に関する因子と解釈し、「親責任」因子とした。第 3 因子では、「子育てをすることで人間的に成長する」「子育ては人生で貴重な経験だ」などの 3 項目で負荷量が高く、子育てを通しての親自身の成長に関する因子と考え、「親の成長」因子とした。第 4 因子では、「一般に、子どもは母親の手で育てるべきだ」「子育てをしなくてはなら

Table 2 シングルファザーの生活や子育てについての因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	共通性
第 1 因子（子育てストレス）					
身体的に疲労している	.87	-.13	.00	-.11	.65
精神的に苦しい	.78	-.08	.04	.05	.63
仕事と家事と子育てを両立していくのは大変だ	.62	.07	.04	-.11	.37
子育てのために仕事に支障をきたすことが多い	.52	.24	-.03	.07	.40
子育てへの不安が強い	.46	.11	-.01	.08	.27
第 2 因子（親責任）					
子どもへの責任感が強い	.11	.69	-.06	.08	.48
子どもとの精神的つながりが強い	-.07	.65	.02	-.03	.44
子どものために努力している	.08	.64	-.01	-.03	.44
子育てに熱心である	-.03	.59	.12	-.01	.42
第 3 因子（親の成長）					
子育てをすることで人間的に成長する	-.01	.00	.84	.15	.67
子育ては人生で貴重な経験だ	.07	-.05	.84	-.05	.69
子育てを通して多くを学んでいる	-.02	.17	.52	-.07	.40
第 4 因子（家族環境）					
一般に、子どもは母親の手で育てるべきだ	-.04	.00	.06	.62	.35
子育てをしなくてはならなくて気の毒だ	.13	.03	-.12	.60	.49
子どものためにも再婚するのが良い	-.15	.09	.06	.54	.23
子どもが順調に育ちにくい	.08	-.19	.03	.51	.35
因子寄与	3.00	2.53	.95	.81	
累積寄与率 (%)	18.73	34.53	40.46	45.54	
信頼性係数 (α)	.78	.75	.79	.66	
因子間相関					
F1	1.00				
F2	.19	1.00			
F3	.05	.49	1.00		
F4	.42	-.17	-.24	1.00	

なくて気の毒だ」などの4項目で負荷量が高く、子育て環境としての家族構成員に関する因子と解釈し、「家族環境」因子とした。

各因子の「評定値の平均値」をみると、「親の成長 ($M 3.35, SD .60$)」が最も高く、「子育てストレス ($M 3.33, SD .51$)」、「親責任 ($M 3.16, SD .51$)」、「家族環境 ($M 2.20, SD .61$)」と続いた。

以上の結果からは、まず、シングルファザーが子育てを通して多くを学び人間的に成長していること、親としての責任を果たす過程で子どもとの精神的なつながりが深まることへの評価が示された。これらはシングルファザーについて報告されている内容に沿っており、親として子育てをしていることへの肯定的理解に通じるものであった。

次に、子育ては母親がするものであり父親のみでは難しいという考えは特に示されず、子育ては母親の役割とする性別役割観にはとらわれていなかった。そして、シングルファザー自身は母親不在に負い目を感じやすく、実際にシングルファザーに対する社会的偏見も根強いと指摘されているが、子育て中の親からはその様な認識は示されなかった。内閣府の世論調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」との考えに反対する人が2007年に初めて過半数を超え(内閣府, 2007)、2009年の最新調査では反対の割合がさらに進んでいる(内閣府, 2009)。これらの結果からは、性別役割に対する人々の認識が柔軟に変化していることが窺え、そのことが父子家族という形態そのものを問題としない見方につながったと考えることができる。その一方で、回答における「社会的好ましさ」が反映された可能性を考慮する必要もあろう。しかし、シングルファザーに対する偏見への抵抗が示されたにせよ、その背景には偏見をもつべきではないという意識が存在すると考えられ、この様な建前意識をもつこと自体がシングルファザーへの理解に向けて重要な意味をもつと思われる。よって、本研究ではこの結果を子育て中の親の認識としてそのまま採用する。

最後に、シングルファザーの抱える問題を、仕事と家事・子育ての両立の困難やそれにとまなうストレスの高さと捉えていることが示された。これは先述した、自由が少なく疲れているというイメージや、シングルマザーに比べて公的支援が少なく生活や子育てにおける困難は大きいと感じていることにも関係しており、子育て中の親は、男性が仕事をしながら子育てをするという生活上の困難をシングルファザーの抱える問題と捉えていることが示された。

3.1.4 シングルファザーの子どもについての認識

シングルファザーの子どもに関する14の質問項目について4段階評定で得られた回答を用いて因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量.40以上を基準に14項目全てが採用され3因子が抽出された(Table 3)。第1因子では、「子どもは精神的に不安定である」「子どもは学校で問題を起こしやすい」などの7項目で負荷量が高く、親との関わりや愛着によりもたらされる精神的安定に関する因子と考え、「心の健康」因子とした。第2因子で

は、「子どもは自立心が育つ」「子どもは社会性が身につく」などの4項目で負荷量が高く、子どもの自主性や社会性に関する因子と考え、「社会的自立」因子とした。第3因子では、「子どもは父親に協力的である」などの3項目で負荷量が高く、父親への理解に関する因子と考え、「親理解」因子とした。

各因子の「評定値の平均値」をみると、「親理解 (M 3.14, SD .54)」が最も高く、「社会的自立 (M 3.05, SD .59)」、「心の健康 (M 2.63, SD .55)」と続いた。そこには、シングルファザーの子どもは父親との生活を通して社会的適応が促進されることへの評価が示されており、シングルファザーの子どもの成長について報告されている内容に沿うものであった。また、子育て中の親からは、シングルファザーが不安に感じている父親ひとりの子育てが子どもの情緒面に与える否定的影響は特に示されず、ここでも父子家族という形態が問題であるとは認識されなかった。

Table 3 シングルファザーの子どもについての因子分析結果

	F1	F2	F3	共通性
第1因子 (心の健康)				
子どもは、精神的に不安定である	.80	.04	-.05	.64
子どもは、学校で問題を起こしやすい	.75	-.10	.11	.58
子どもは、非行化しやすい	.72	-.02	-.02	.53
子どもは、親から十分な世話を受けられない	.66	.05	-.05	.43
子どもは、淋しいだろう	.60	-.04	.08	.36
子どもは、母親がいなくてかわいそうだ	.58	.05	-.03	.33
子どもには、母親が必要である	.51	.03	-.02	.25
第2因子 (社会的自立)				
子どもは、自立心が育つ	.04	.84	-.09	.61
子どもは、社会性が身につく	-.10	.81	.03	.73
子どもは、周囲への思いやりが育つ	-.02	.81	.04	.70
子どもは、家事能力が身につく	.15	.46	.29	.43
第3因子 (親理解)				
子どもは、父親に協力的である	-.04	-.04	.84	.67
子どもは、父親のことを理解している	-.06	.04	.77	.65
子どもは、父親の背中を見て育つ	.10	.02	.47	.23
因子寄与	3.82	2.60	.73	
累積寄与率 (%)	27.32	45.88	51.07	
信頼性係数 (α)	.84	.85	.72	
因子間相関	F1	1.00		
	F2	-.24	1.00	
	F3	-.15	.59	1.00

3.1.5 シングルファザーと子どもへのサポートについての認識

シングルファザーと子どもへのサポートに関する14の質問項目について4段階評定で得られた回答を用いて因子分析(最尤法、プロマックス回転)を行い、因子負荷量.40以上を基準

に2項目を除いた。その後、採用した12項目について再分析を行い4因子が抽出された (Table 4)。第1因子では、「子どもが困っている時には助けたい」などの3項目で負荷量が高く、子どもへの協力に関する因子であり、「子ども支援」因子とした。第2因子では、「シングルファザーが必要とするサポートが具体的に分かれば協力したい」などの3項目で負荷量が大きく、父親への協力に関する因子であり、「親支援」因子とした。第3因子では、「シングルファザーがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい」などの4項目で負荷量が大きく、必要なサポートが不明でどの様に関わったら良いかが分からないという内容の因子と考え、「とまどい」因子とした。第4因子では、「子どもに対して特別な配慮はしない」などの2項目で負荷量が大きく、特別な気遣いをせず普通に接するといったノーマライゼーションに関する因子と解釈し、「特別な配慮なし」因子とした。

そして、各因子の「評定値の平均値」は「子ども支援 (M 3.40, SD .51)」が最も高く、次に「親支援 (M 2.93, SD .58)」、「とまどい (M 2.75, SD .63)」、「特別な配慮なし (M 2.50, SD .78)」と続いた。そこには、シングルファザーと特にその子どもに協力的で、シングルファザー一家族

Table 4 シングルファザーと子どもへのサポートについての因子分析結果

	F1	F2	F3	F4	共通性
第1因子 (子ども支援)					
子どもが困っているときには助けたい	.98	-.07	.06	.02	.88
子どもが必要とするサポートが具体的に分かれば助けたい	.81	.11	.06	-.05	.75
子どもにはあまり関わりたくない*	-.50	-.07	.23	.03	.38
第2因子 (親支援)					
シングルファザーが必要とするサポートが具体的に分かれば協力したい	-.04	.93	.03	.03	.82
シングルファザーから要望があれば協力したい	.10	.74	.05	-.03	.61
シングルファザーの相談にのりたい	.00	.59	-.08	-.02	.38
第3因子 (とまどい)					
シングルファザーがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい	.17	-.06	.68	.03	.49
子どもがどのようなサポートを必要としているかは分かりにくい	.01	.08	.67	.12	.46
子どもがどう関わったら良いか分からない	-.17	-.01	.65	-.13	.49
シングルファザーとどう関わったら良いか分からない	-.04	-.01	.64	-.15	.44
第4因子 (特別な配慮なし)					
子どもに対して特別な配慮はしない	-.12	.08	.01	.76	.59
シングルファザーだからといって特別な配慮はしない	.07	-.10	-.01	.67	.47
因子寄与	2.86	1.06	1.75	1.09	
累積寄与率 (%)	23.87	32.71	47.30	56.41	
信頼性係数 (α)	.80	.80	.75	.66	
因子間相関	F1	1.00			
	F2	.47	1.00		
	F3	-.14	-.13	1.00	
	F4	-.06	-.09	.01	1.00

注. *は逆転項目である。

への理解が示されていた。一方、実際に彼らがどのようなサポートを必要としているかが分からないという傾向も示され、シングルファザーの子育ての実情について知る機会の少なさが窺われた。

3.2 シングルファザーに対する認識における回答者の属性による違い

以上で明らかにされたシングルファザーの子育てに対する認識において、「養育している子どもの年齢」「父親と母親」「シングルファザーと接する機会の有無」による違いがみられるのかを検討するために、尺度得点平均値の差の検定を行った。「シングルファザーに対するイメージ」については以上の属性による差がみられなかったため、「シングルファザーの生活や子育て」「シングルファザーの子ども」「シングルファザーと子どもへのサポート」の3領域の11因子で比較した結果を述べる。そこから、本研究で明らかにする第3の設問である「シングルファザーに対する認識に個人のもつジェンダー意識や生活や子育てを通しての経験がどの様に関係しているのか」について考察する。

3.2.1 養育している子どもの年齢による認識の違い

長子年齢を未就学（134人）・小学生（155人）・中学生以上（118人）の3群に分け、3領域の計11因子ごとに一要因の分散分析を行った。その結果、「シングルファザーの生活や子育て」の「親責任」「親の成長」と「シングルファザーの子ども」の「社会的自立」において有意な主効果がみられ、いずれも長子が未就学の親の認識が高かった（Table 5）。従って、長子に未就学の子どもをもつ親の方が就学以上の子どもをもつ親よりも、シングルファザーの責任感や親としての成長、および子どもの社会的自立に対して、より肯定的に認識していることが示された。実際に、乳幼児の子育てにおいては子どもの身の回りの世話を中心に親役割は比較的明確であるが、子どもの年齢が高くなるにつれて子どもにとっての親の機能や意味、親子の関係は質的に変化する（柏木, 2003）。従って、就学以上の子どもをもつ親は子どもの年齢が高くなることで子育ての難しさを実感することにより、未就学の子どもをもつ親との認識に違いがみられたと考えられる。この様に、子育て中の親は自身の子育ての時期と回答に際して

Table 5 養育している子どもの年齢により認識の違いが認められた因子の分散分析結果

因子		①未就学	②小学生	③中学生以上	F 値	多重比較 (Tukey)
		(n=134) 平均値 (SD)	(n=155) 平均値 (SD)	(n=118) 平均値 (SD)		
生活・子育て	2. 親の責任	3.26 (.51)	3.11 (.48)	3.13 (.63)	3.69*	①>②*
	3. 親の成長	3.48 (.54)	3.29 (.61)	3.27 (.64)	5.38**	①>②③*
子ども	2. 社会的自立	3.16 (.56)	3.03 (.64)	2.96 (.55)	3.84*	①>③*

注. * $p < .05$, ** $p < .01$

想定するシングルファザーの子育ての時期を重ねており、個人のもつ子育て経験に基づいた認識が示された可能性がある。

3.2.2 父親と母親による認識の違い

父親（166人）と母親（241人）による認識の違いをみるために3領域の計11因子ごとにt検定を行い、いくつかの因子で有意差が認められた（Table 6）。まず、「シングルファザーの生活や子育て」では、「子育てストレス」「親責任」「家族環境」において父親は母親より高く、「親の成長」では母親が父親より高かった。次に、「シングルファザーの子ども」では、「心の健康」において父親は母親より高く、「社会的自立」「親理解」では母親が父親より高かった。また、「シングルファザーと子どもへのサポート」については、「子ども支援」「親支援」において母親の認識が父親より高かった。そこには、父親は母親よりシングルファザーの大変さを認識し、生活や子育てへの責任感を評価する一方で、母親不在の家族環境や子どもの精神面に与える否定的な影響を懸念するなど、シングルファザーの子育ての難しさを感じていることが示された。一方、母親は父親より、シングルファザーが子育てを通して人間的に成長するとともに子どもの社会性や親への理解も促進されることを評価し、シングルファザーと子どもへのサポートについても協力的な姿勢であった。

厚生労働省（2003）は、父親も家事や育児を仕事と同等かそれ以上に優先させたいと希望しているが現実には仕事を優先せざるを得ない状況にあり、子育てに十分な時間をかけられないことを問題点としてあげる者が多いと指摘している。そのことから、父親は、現存する性別役割分業社会においてシングルファザーが仕事と家事・子育てを両立させることの困難を、母親よりも強く認識せざるを得ない状況にあると解釈できる。

Table 6 父親と母親による認識の違いに関するt検定結果

	因子	父親 (n=166) 平均値 (SD)	母親 (n=241) 平均値 (SD)	t 値
生活・子育て	1. 子育てストレス	3.40 (.50)	> 3.26 (.52)	2.46*
	2. 親責任	3.24 (.51)	> 3.11 (.51)	2.40*
	3. 親の成長	3.23 (.54)	< 3.43 (.58)	3.30**
	4. 家族環境	2.38 (.61)	< 2.08 (.58)	4.95***
子ども	1. 心の健康	2.73 (.26)	> 2.55 (.53)	3.26**
	2. 社会的自立	2.97 (.60)	< 3.11 (.58)	2.39*
	3. 親理解	2.99 (.55)	< 3.24 (.50)	4.76***
サポート	1. 子ども支援	3.27 (.54)	< 3.50 (.47)	4.46***
	2. 親支援	2.83 (.63)	< 2.97 (.53)	2.80**
	3. とまどい	2.78 (.67)	2.73 (.60)	.73
	4. 特別な配慮なし	2.58 (.80)	2.46 (.77)	1.50

注.*p<.05、**p<.01、***p<.001

一方、母親はシングルファザーと同様に子育てに関与している立場において、彼らに共感的な理解を示し親子の成長を評価していた。そこには、母親は父親より、子育てを通しての視野の広がりや親の成長など、子育ての意義を感じている（厚生労働省, 2003）という傾向が、シングルファザーの子育てに対しても示されたと思われる。

次に、母親の就労の有無により認識に違いがみられるのかを検討するために、就労（フルタイムおよびパートタイムその他）と非就労（専業主婦）で認識を比較した（*t*検定）。その結果、父親（妻就労 68 人、妻非就労 98 人）においては、「シングルファザーと子どもへのサポート」の「親支援（妻就労 M 2.96, SD .57、妻非就労 M 2.73, SD .66）」（ $t(155) = 2.37, p < .05$ ）で、妻就労の父親が有意に高かった。従って、妻が就労している父親の方が専業主婦の妻をもつ父親よりシングルファザーへのサポートに対する関心が高く、妻の就労にともない仕事と家事・子育ての両立の大変さを知ること、サポートの必要性を感じていたと考えられる。一方、母親（就労 124 人、非就労 116 人）においては、自身の就労の有無によるシングルファザーへの認識の違いはみられなかった。従って、先述した父親と母親の認識の違いは大方において共働きの有無に関わらず示される特徴と考えられた。

3.2.3 シングルファザーと接する機会の有無による認識の違い

これまでシングルファザーと接する機会が「ある」145 人と「ない」261 人による認識の違いをみるために、3 領域の計 11 因子ごとに *t* 検定を行った。その結果、「シングルファザーと子どもへのサポート」において有意差がみられ、「子ども支援（「ある」 M 3.49, SD .47、「ない」 M 3.35, SD .53）」では「ある」は「ない」より高く（ $t(397) = 2.70, p < .01$ ）、「とまどい（「ある」 M 2.64, SD .65、「ない」 M 2.82, SD .61）」では「ない」は「ある」より高かった（ $t(394) = 2.74, p < .01$ ）。そこには、シングルファザーと接する機会のある人はない人よりも子どもへのサポートに対する関心が高く、機会のない人はある人に比べて何が必要とされていてどの様に関わったらよいか分からないと感じていることが示された。従って、子育て中の親はシングルファザーと接する経験をもつことで実情を知りサポート意識を高めると考えられた。

4 総合考察

本研究において、子育て中の親からはシングルファザーの子育てに対する理解とサポートへの関心が示された。この様に、シングルファザーを特別視せず、彼らの抱える困難とそれに対する努力を理解すること自体がシングルファザーへのサポートとなり、地域で助け合うなどの日常的な直接のサポートにつながると考えられる。但し、本研究の対象者は東京近郊在住であり、首都圏という地域的特徴が示された可能性も考慮する必要があるだろう。例えば、首都圏では地方に比べて核家族が多く、幼児をもつ母親の就労率が低い（Benesse 教育研究開発セン

ター, 2008) ことから、首都圏の親ほど仕事をしながら子育てをすることの大変さを感じていると推測される。その様な子育てを取り巻く状況がシングルファザーへの認識にも反映された可能性があり、子育て環境の地域差を考慮した検討が今後の研究課題と思われる。

その一方で、シングルファザーと接する機会の少なさから彼らが必要としているサポートが分かりにくいことが指摘された。従って、シングルファザーの生活や子育てに関する情報やサポートニーズを具体的に提示することが、サポートの実践に向けて必要であると考えられた。また、シングルファザー自身が父親ひとりの子育てに社会的な負目を感じているという観点からは、本研究で示された子育て中の親の認識をシングルファザーにフィードバックすることも重要と思われる。なぜなら、子育て中の親は父親ひとりの子育てが子どもの成長発達に否定的な影響を及ぼすという見方はしておらず、また、シングルファザー家族に対しても協力したいという姿勢にあると知ることにより、シングルファザーは勇気付けられ、子育てへの不安も軽減されると予測されるからである。さらに、人々が協力的であると知ることは、シングルファザーが自らの実情を伝え周囲の協力を求めるなど、シングルファザー側からの働きかけを促すことにもつながると考えられる。

Greif (1990) は、シングルファザーが多くの困難に立ち向かっていることを社会の人々は認識すべきであり、また、シングルファザーも完璧になろうとせずに周囲の理解や協力を求めることにより生活のバランスを保つことが重要であると指摘している。この様に、シングルファザーと身近な人々との双方向の関係をもつことが、シングルファザーへの地域における日常的なサポートにとって重要であり、本研究では子育て中の親との連携に向けた具体的な課題が示されたと考えられる。

References

- Benesse 教育研究開発センター. (2008). 第 3 回子育て生活基本調査報告書 幼児版.
- Demo, D. H., & Acock, A. C. (1996). Family structure, family process, and adolescent well-being. *Journal of Research on Adolescence*, 6, 457-488.
- 土堤内昭雄. (2004). 父親が子育てに出会う時:「育児」と「育自」の楽しみ再発見. 筒井書房.
- Greif, G. L. (1990). *The daddy track and the single father*. Massachusetts: Lexington Books.
- 平沼晶子. (2007). シングルファザーの育児と周囲の受けとめ. 『日本教育心理学会第 49 回総会発表論文集』, 547.
- 平沼晶子. (2008). シングルファザーは子育てを通してどう生きるか. 『日本発達心理学会第 19 回大会発表論文集』, 585.
- 平沼晶子・秦野悦子. (2004). シングル・ファザーの心理社会的適応. 『日本発達心理学会第 15 回大会発表論文集』, 97.
- 池田英雄. (1996). 『父子家庭のお父さん奮戦記: 母親不在の子育てに挑戦』. 新風舎.
- 井上正明・小林利宣. (1985). 日本における SD 法による研究分野とその形容詞対尺度構成の概観. 『教育心理学研究』, 33, 253-260.
- 柏木恵子. (1993). 『父親の発達心理学: 父親の現在とその周辺』. 川島書店.
- 柏木恵子. (2003). 『家族心理学: 社会変動・発達・ジェンダーの視点』. 東京大学出版会.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2003). 子育て支援策等に関する調査研究報告書.
- 厚生労働省雇用均等・児童家庭局. (2005). 平成 15 年度 全国母子世帯等調査結果報告.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2004). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2007). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 内閣府大臣官房政府広報室. (2009). 男女共同参画社会に関する世論調査.
- 小田切紀子. (2003). 離婚に対する否定的意識の形成過程: 大学生を対象として. 『発達心理学研究』, 14, 245-256.
- 大日向雅美. (2003). 一人親家庭の子育て: 今必要とされる単親家庭へのサポート. 『灯台』, 519, 19-21.
- 大日向雅美. (2005). 父子家庭にのしかかる社会的プレッシャー、そして、“母性神話”. 『NHK すくすく子育て』, 29, 57.
- 東京女性財団. (1993). ひとり親家族に関する研究: 東京都女性問題調査研究報告.
- Weinraub, M., & Gringlas, M. B. (1995). Single parenthood. In M. H. Bornstein (Ed.). *Handbook of parenting*. Vol. 3. *Status and social conditions of parenting* (pp. 65-87). New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates.

Author Note

謝辞

本論文をまとめるにあたり、白百合女子大学の秦野悦子教授に貴重なご助言ならびにご指導を頂きました。深く感謝いたします。また、調査にご協力頂きました皆様に心より御礼申し上げます。尚、本研究の一部は 2005 年度財団法人小平記念日立教育振興財団家庭教育研究奨励金の補助を受けて行われました。

Footnotes

- ¹ 本研究では、東京女性財団（1993）を参考に、生活実態としての「家族」の力動やシステムに着目するという観点に立ち、「ひとり親家庭」「母子家庭」「父子家庭」ではなく、「ひとり親家族」「母子家族」「父子家族」という言葉を使用した。
- ² シングルファザーは和製語であり、シングル（single）とファザー（father）の合成語である。筆者は、「シングルファザー」を固有の意味をもつ一語としてこの表記を用いることとした。
- ³ 厚生労働省（2005）による2003年度調査報告によると、母子世帯（父のいない満20歳未満で未婚の子どもがその母によって養育されている世帯）が全世帯に占める割合は2.7%（約37世帯に1世帯）、父子世帯（母のいない満20歳未満で未婚の子どもがその父によって養育されている世帯）は0.4%（約250世帯に1世帯）となっており、母子世帯：父子世帯＝約7：1と推計されている。
- ⁴ 同上。

Cognitions of Child Rearing Parents about Single Fathers

Akiko HIRANUMA

Cognitions of child rearing parents about single fathers were investigated. A questionnaire was administered to parent participants of dual parent families with infants to junior high school age children (n=407). The responses were factor analyzed and characteristics of participants' cognition were examined. The results indicated the following. (1) Single fathers were highly evaluated as having responsibility for life and childcare, and for developing as a parent. (2) Social orientation of the children was promoted through living with their fathers. (3) Participants had a positive attitude towards single father families, did not value the family environment with gender-based roles and had no negative impressions about families with only the father. Participants understood the problems of single fathers, such as simultaneously having to work, do housework and child care. Those surveyed showed positive understanding, support and interest in single fathers. Survey results prove the possibility of creating local, day-to-day support networks for single fathers and partnerships between single fathers and their neighbors. It is important to offer information about the social needs of single fathers and promote a positive approach towards them. It is expected that such information would promote the cooperation between single fathers and people around them.

Keywords:

single father, family with one parent, child rearing, gender-based roles, support